その国にはとても美しいお姫様がおりました。
お姫様は金色の美しい髪と透き通った海のように青い瞳を持っていました。
肌も白く、上品な出で立ちで全ての人を魅了しました。
声は誰の耳にも心地よく響き、
その笑顔は美しく太陽のようにまぶしいものでした。
お姫様はなんでも持っていました。
美しく豪華で質の高い生地で丹念に作られたドレスも、
東の国々から取り寄せた高価な宝石も、
貴重な動物の毛皮もペットもなにもかももっていました。
「ぼくと結婚してください。」
と、何人もの王子様に手紙やプレゼントをもらいました。
ダンスパーティーに行けば多くの人からダンスを申し込まれ、
皆口々にお姫さまの美しさを賛美するのです。
皆はそんなお姫さまをうらやましがり、そして憧れのまなざしをむけるのでした。
「でも、もういい加減あきてしまったのよ。」
お姫さまは一人呟きました。
「結婚を申し込む王子たちは皆美しくて素敵な方たちばかり。だけど何か違うのよ。」
そんなお姫さまの言い分は他から見れば理解ができませんでした。
なぜならそれは贅沢な言い分でしかなかったのです。
だからお姫さまはますます嬉しくありませんでした。
そしてますます今の生活に満足できなくなってしまったのです。
そんなある時、隣の国の立派な騎士がお姫さまの目の前に現れました。
その騎士はお姫さまが今まで会った以上に美しく、上品で威厳に満ちていました。
お姫さまは一瞬でその騎士の虜になってしまいました。
お姫さまは毎日のようにその騎士を部屋に招待したり、庭を散歩したりしました。
だけど日に日に、お姫さまはあることに気づくのでした。
「あなたは最近、いつも心ここにあらずの状態だわ。」
お姫さまは顔をしかめて言いました。
「わたくしではご不満なのかしら？」
お姫さまは冗談交じりでそうたずねました。
なぜならお姫さまは今まで「不満」だと思われたことがなかったのですから。
だけどこの騎士は違いました。
この騎士はまっすぐとした視線でお姫さまの瞳をとらえてこう言ったのです。
「実はわたしには昔から愛している人がいるのです。」
お姫さまは驚きました。
今まで、お姫さまの回りの王子たちは、彼女を前に、他の女の話などしたことがなかったのです。
お姫さまは言葉を失いました。
「その愛している人というのはわたくしのことではないのですか？」

騎士は首をふりました。
お姫さまは今まで味わったことのない悲しみと怒りを感じました。
「それではあなたはいったい誰を愛しているのかを教えてはくれませんか？」
お姫さまは尋ねました。
「その人はこの城で働いている兵士の娘で、この城で働いています。」
すると兵士はふと庭の奥を見つめました。
そしてお姫さまにではない誰かに微笑みかけました。
お姫さまはこの騎士はここまで優しく微笑みかけるところを見たことがありませんでした。
お姫さまは振り向きました。
するとそこには驚いた顔をして深々とお辞儀をする娘がいました。
足元には花に水をやるための桶がおかれています。
その娘はお姫さまの侍女のさらに下につく召使いでした。
娘はそのままおそるおそる顔を上げ、お姫さまの顔を見ました。
お姫さまはいつも他の人たちに見せるのと同じような笑顔を見せて手をふりました。
すると娘ははにかんだように笑うとそのまま花に水をやりながら庭の奥に消えてゆきました。
「あの娘ですか？」
お姫さまは騎士と目を合わせずにたずねました。
騎士は静かに頷きました。
お姫さまは悔しさでいっぱいでした。
そしてこの騎士のように人を心から愛せるのがうらやましくもあり、
ますます騎士を愛おしく思うのでした。
なにより、お姫さまは召使いに負けたということが許せませんでした。
そしてその召使いはお姫さまと比べ者にならないほどお世辞にも美しいとは言える容貌でもなかったのです。
お姫さまは窓辺に座り空を見ました。
そして大きく息をすいため息をつきました。
胸の奥につっかえた何かを吐き出したかったのです。
考えるだけで、騎士のことが愛おしくてなりませんでした。
あの優しい笑顔で笑いかけてほしい・・
あの瞳でずっと見つめていてもらいたい・・
そして愛してほしい。
でもそれは叶わないのです。
なぜならあの騎士はお姫さまではない誰かを愛しているからです。
お姫さまは目を閉じました。
忘れてしまいたいと思いました。
だけどそう思えば思うほど、忘れられずにいたのです。

「わたくしは美しくはないの？あの召使いのほうが美しいというの？」
お姫さまは嵐のように怒り狂うようになりました。
侍女たちもおそれて近寄れないほどに癇癪を起こすのです。
だけどその後は始終テーブルにふせって泣くのです。
なにもないときにはため息しかでません。
なにもかも手につきませんでした。
ふと、窓から外を見ると、あの召使いが庭で花の手入れをしています。
彼女の焦げ茶の髪も日に焼けた肌も、ブラウンの瞳も、暗く、美しいとはいえないのです。
・・・・・・どうして？どうして？どうして？
彼女を見かけるたびに
お姫さまは悔しくてしかたありません。
しだいにお姫さまの嫉妬は確かな形をおびてきました。
最初に召使いの娘の親類である兵士が城から追い出されました。
そして次に召使いの娘はお姫さまの大切な薔薇を枯らしたという罪で追い出し、あらぬ汚名をきせました。
もちろん、すべてお姫さまが仕組んだことでした。
すると、騎士は城を訪れなくなりました。
お姫さまは哀しくてしかたありませんでした。
今までお姫さまの手にはいらなかったものは何もなかったのです。
お姫さまはますます我が儘で手におえなくなってゆきました。
豪華に着飾り、お金を無駄に使い、民を大切にも思わず、
回りの人たちに八つ当たりをするのです。
そして始終無理な注文をつけては、望み通りにいかないとわめき立てます。
・・・・・しだいにお姫さまの回りから人は遠のいてゆきました。
そしてお姫さまはひとりぼっちで窓際に座り、庭の薔薇にむかって呟くのです。
「誰もわたくしのことを理解してはくれないの。」
そしてふと、その薔薇の美しさが憎らしくなりました。
お姫さまは一本の朝露にぬれる美しい薔薇の茎に手を触れました。
「痛いっ！」
薔薇の棘はお姫さまの美しい指先を傷つけました。
「なんて無礼な薔薇なのでしょう。」
そしてついにお姫さまは城のものに、庭の薔薇をすべて燃やしてしまえという命令を出したのです。
次の日、庭の薔薇は全て摘み取られました。
そして裏庭の一角にあつめられ、優雅な薔薇の香りを残したまま、炎に包まれました。
お姫さまはその様子を窓から見つめていました。
そしてふと振り返り、鏡に映った自分の姿を見ました。
お姫さまは目を疑いました。
その鏡にうつっていたのは、

かつての優雅な美しさを持ったお姫さまではありませんでした。
まぎれもない、嫉妬と憎悪に染まった魔女だったのです。
お姫さまは手元にあった本をなげてその鏡を叩き割りました。
そしてそのまま城を飛び出しました。
心は抜け殻のようでお姫さまは空っぽでした。
城を飛び出してから始終歩きずめで追いかけてくるものもいません。
服は汚れ、髪は乱れ、腕はすりきれ、ついに森の中で倒れてしまいました。
「お姫さま？お姫さま？お気を確かに。」
お姫さまはもうろうとした意識の中で声を聞きました。
若い男の声でした。
お姫さまはゆっくりと目をあけました。
そこには真っ赤な髪をもつ青年がいたのです。
「あなたは？」
お姫さまは警戒して尋ねました。
「わたしは城のものです。お姫さまが城を飛び出したのを聞いて追いかけてきたのです。」
青年はお姫さまに微笑みました。
お姫さまはその瞬間、心が洗われる気分になりました。
お姫さまは今まで、そのように心からほほえんでもらったことがなかったのです。
「わたくしはひとりぼっちで、誰もおいかけてくれるものなどいないとおもっておりました。」
お姫さまはかすれた声で呟きました。
「わたくしは嫉妬に狂った醜い女です。そして今や誰もわたくしのそばに来てはくれません。
どうしてあなたはおそれもしない純粋な瞳でわたくしを見つめることができるのです？」
青年ははにかんだように笑った。
「わたしはお姫さまの優しさも、あなたの隠れた美しさも魅力も全てしっているからにございます。」
「でもわたくしは城であなたに会ったことさえありません。」
お姫さまは身を起こしました。
「お姫さまは気づかれてはいないでしょうが、わたしはいつもお姫さまを見ておりました。」
そして青年は言いました。
「お姫さまは醜いかたではございません。お美しい方です。あなたはあの召使いに嫉妬されただけなのです。」
お姫さまはむっとした表情で青年をにらみつけました。
「あの騎士が召使いに惹かれた理由はどこにあると思います？」
お姫さまは視線を落とて首をふりました。
「召使いの娘はお姫さまほど美しいとはいえないかもしれません。しかしあの方が花に愛情を注いで微笑みかける姿は天使のようなのです。実は、あの娘の生まれは貧しいもので、病気の母と何人もの幼い妹たちを抱えているそうです。生活も苦しいのでしょう。しかし彼女はその苦労を表には出しません。お姫さまのように望んだものがすぐに手にはいる環境でもございません。それでも彼女は育ててくれた両親を心から愛するからこそ、そしてあの騎士を心から愛しているからこそ、何も望まないのです。愛する人たちが幸せに生きてゆけるのならそれでも良いとおもっているのです。」
青年は続けました。

「愛は優しさを生み出します。優しさは温かな微笑みを生み出し、そしてその微笑みは、どんな宝石や美女よりも魅力的なものなのです。」
お姫さまは何も言いませんでした。
何も言えなかったのです。
思えば、あの召使いの娘の笑顔を見るたびに嫉妬していたのはお姫さまでした。
その召使いはお姫さまのもっていないものを持っていたのです。
そしてお姫さまはそれに嫉妬していたのです。
「お姫さま、もしあなたが心から騎士様を愛しておられるのなら、騎士様の一番の幸せをお望み下さい。
そして大切なのは、愛されることばかり求めるのではなく、愛せる人になるということです。人を愛せる人は、愛した人の真の幸福を願うものなのですよ。」
青年はもう一度ほほえみました。
お姫さまはこの青年の笑顔を見て言いました。
「あなたも人を心から愛し、その人の幸せを願う人なのね。」
青年は頷きました。
「お姫さま、あなたがわたしを愛で、話しかけ、歌われたとき、わたしはあなたを心から愛するようになったのですよ。」
お姫さまは首を傾げました。
お姫さまはやっぱりこの青年に会ったことなどなかったのです。
「さあ、もう時間がきてしまったようです。あなたに一目お会いしてお伝えしたいことがありましたので、限られた時間でこの姿をいただくことができました。もう魔法がとけてしまうようです。」
お姫さまは青年の腕にふれました。
「消えてしまうの？」
青年は頷きました。
「あなたの指先を棘で傷つけてしまったことをおゆるしください。」
その瞬間、なんの音もなく、青年は消えました。
まるでそこには最初から誰もいなかったように、
空っぽの空気だけが残っているようでした。
だけどお姫さまはその中に甘い薔薇の香りがほのかに香るのに気づきました。
ふと、お姫さまが見上げると空から薔薇の花びらが舞い降り手のひらにふわりと落ちてきます。
・・そして気づきました。
「あなたはわたくしが燃やしてしまった・・薔薇だったのね。」
お姫さまはそのまま涙を流しました。
小さな薔薇の一つ一つにも命があり、
薔薇さえもお姫さまのことを想っていてくれたのに、
お姫さまはほんのささいないらだちで薔薇をもやしてしまったのです。
「なんてことをしてしまったのでしょう。」
お姫さまはその場でうずくまって泣きました。
召使いの娘とその兵士を城から追い出してしまったこともひどく後悔しました。
そして二人を呼び寄せ、心から謝罪をしました。
騎士と娘の仲も取り持ち、身分の差を超えて、二人を結びつけました。

すっかり寂しくなってしまった庭には、お姫さま、自らの手で薔薇を植えました。
お姫さまは幸せそうな騎士と召使いの娘を思い出し、ふいに、薔薇にふれました。
お姫様の手は薔薇のとげにすりきれ、土で汚れていましたが、お姫様は気にも留めません。
「わたくしにもいつか、あんなに素敵にほほえむことができるのかしら？」
そういったお姫さまの笑顔はいつにまして、優しく、愛らしく、魅力的なものでした。